

## ギリシャ国立劇場の歩み

鈴木 敦也

### 1. <sup>ヴァシリコ・セアトロ</sup>王立劇場

十九世紀末、かねてギリシャの文教水準の向上を望んでいた国王ゲオルギオス一世に海外在住の富裕なギリシャ商人たちから拠出金が寄せられた。ギリシャ国立劇場はこの拠出金をもとに、同国王のイニシアチブにより創設され、建物はドイツ人建築家チーレルの手によって完成した。同国王の栄誉を讃えて劇場は<sup>ヴァシリコ・セアトロ</sup>王立劇場と呼ばれるようになり、国王がその運営についての重い財政的責任を負うことになった。現実には上演が始まったのは1901年11月。それから経済的に行き詰まり、1908年4月に閉鎖されるまでの七年間に百四十の劇が上演された。しかし以降は少しづつ寂れ、いろいろな催し物の会場や賑やかな記念行事などの練習場として使われていった。こうした状況は1930年まで続いた。

### 2. <sup>エスニコ・セアトロ</sup>国立劇場としての再生

この年、当時ヴェニゼロス内閣の文相で近代ギリシャ屈指の演劇愛好家として知られるゲオルギオス・パパンドレウ（アンドレアスの父）が、今度はこれを国家の機関として再び機能させることを決心した。1930年5月3日、この内容の法案が議会で可決され、ここに正式にギリシャ国立劇場<sup>エスニコ・セアトロ</sup>は発足したのである。この事態は既存の演劇界、とりわけこの時代のギリシャを風靡していた二大劇団「マリカ」と「キヴェリ」等に不安を引き起こした。というのは、文字通り自分たちの演劇界に闖入してきた大物が多くの観客を奪うばかりか、有名で実力ある俳優たちをも引き抜いてゆくのを目にしたからである。

だが、この時代のかんりの文化人たちも、それぞれが自分の信条や利害から抵抗を示したのである。例えば、新聞記者で劇作家のT・モライティニスは、国家は国立劇場などを創るよりも、二、三の既存の立派な劇団に補助金を与えるべきだと主張したが、立派な劇団とは、実は自分の劇作品を上演している劇団

のことであった。また、A・トリロスは「国立劇場など創っても無駄だ。演劇自体が映画に押されて息も絶えだえの有り様なんだから」との立場であった。戦闘的姿勢を示すものにはスピロス・メラスもおり、提供された専属演出家の地位を引き受けなかったばかりか、「全ての権限を握らぬ限り国立劇場には入らぬ。あんなものは撃沈してやる」とまで言明している。当時は政府内部でさえ、いろいろな反発があった。財政大臣は頑固にこの新しい機関への補助金交付を渋った。しかしパバンドレウも頑固で、立ち塞がる妨害を少しづつ乗り越えて劇場開設に漕ぎつけた。かれは運営評議会を最も著名な文芸界の人々で構成し、総支配人としてI・グリパリスを配したが、演劇界ジャーナリズム、政界舞台裏等でのいろいろな駆け引きを経て、世間的に大きな歓迎を受けた。しかし、詩人としては優れたグリパリスも当時の演劇界の慣行・人脈には通じていなかった。劇作家で運営評議会メンバーのTh・シナディオスは「グリパリスは国立劇場支配人在任中、詩人としての特性を発揮することもなく、劇場では異邦人であり、芸術委員会などは無用の産物と見なしていた」と回想録に記している。しかしグリパリスが演劇界の現実と大した接触がなかったということは、むしろ国立劇場にとっては幸運だったのかもしれない。何故ならこのことが専属演出家F・ポリティスに、国立劇場という新しい船を上手に操縦してゆくための自由な裁量の場を残してくれたからである。ポリティスこそはギリシャ最初の国立劇場を支える強力な基礎を置いた人であった。もっとも、専属演出家を最初に打診されたのはスピロス・メラスだったが、如上の理由からかれは引き受けなかった。その後白羽の矢が立ったのは劇作家で新聞記者のM・リドリキスだった。かれは直ぐ引き受けたが、最終的には何故かかれを外して専属演出家の仕事がポリティスに委ねられた。運営評議会の第一の主要な仕事は専属劇団の創設であったが、地位を得ようと多数の俳優たちがたちまち劇場の控え室に溢れかえり、申し込みが雨霰のように降ってきた。望みの入場券を手に入れようとして知人の政治家・閣僚たちの名刺や圧力、陰謀、暗がりでの刃傷沙汰、相互の中傷合戦、とあらゆる策を勞した。当時の貧しい日給に苦しんでいた俳優たちが国家予算という経済的保障を天空からの食物と受けとったのは、けだし当然であった。国立劇場運営評議会議長であった演劇史家のN・ラスカリスは、1931年1月9日付「エレフセロン・ヴィーマ」紙に「すべてのギリシャ人俳優たちは皆国立劇場に入りたがっている」と書いている。運営評議会も困乱、俳優たちを雇用したり、解雇したりと矛盾した決定を下す始末。初めは演劇界の高名なるコトプーリとキヴェリに協力してくれるよう交渉したが、結局提案は

受け入れられなかった。その後、当初の予定給与に二千ドラクマを上乗せしてA・ヴェアキスが雇用された。それからは、その他の専属俳優たちの雇用という終わりのない舞踏が1931年の全期間続いた。評議会はすべての俳優を40回もテストし、三十七人の専属劇団を形成した。私が今でも覚えている名前に限ると、デンドラミス、バクシヌー、ミランダ（キヴェリの娘）、パパダーキ、ミノティス、グリノス、ムスターカ、カトラキス、アローニス、ヴェアキ、ミラット（ミーツォス）、コツオプロス等などが最初の幸運な俳優たちであった。

### 3. 国立劇場の発足と操業

#### (1) ポリティスの時代

1932年3月19日はアイスキュロスの「アガメムノン」と、グリゴリオス・クセノプロスがこの日のために書き下ろした一幕の「崇高な夢」をもって国立劇場が華々しく開幕するという歴史的な日となった。ここに見られるのは、観客が胸を引き裂く悲劇で胃袋を重くして劇場から帰ることのないよう、口直しのため一幕の喜劇で補足するというバランスの精神である。初日にはA・ザイミス大統領、E・ヴェニゼロス首相、G・パパンドレウ文相、M・メルクーリ市長ほか多くの公的な立場の人々や文芸界の名士たちが列席した。

この上演は大成功を博した。ギリシャの観客は初めて選び抜かれた俳優たち、豊かな舞台背景と衣装によって、プロンプターの気配も感じられぬほど完全に仕上げられた光景を舞台上に確かに見たのである。32年3月22日付「エスティア」紙の演劇欄執筆者は次のように述べている。「観客にとってそれは驚きであった。観客たちは何年も舞台上では背景も衣装も貧弱で衰れむべき状態、主演の役者ときたらいつもプロンプターの声の方がよく聞こえるという怖るべきお粗末な状態を舞台で見続けてきたからであった。」

一般大衆にとって古代悲劇は未知<sup>テラインコグニタ</sup>の領域であり、舞台上で演じられているものを疑わしげな怯えたような目で見つめていたのも当然であった。当時の新聞の批評家たちは「観客の多くはクセノプロスの喜劇『崇高な夢』でほっとしたのであり、『アイスキュロスはクセノプロスに食われてしまった』と叫んだ者もいた」とこれを報じた。アイスキュロスの悲劇は今日の世代には重すぎるのだと見なす批評家もいた。観客が疲れすぎないように悲劇の中ほどで休憩をして上演を二つに切ったことを報じた新聞もある。だが「アガメムノン」の上演にはこうした容認しがたいことの他に笑いを誘う場面もあった。ポリティスは舞台をいっそう印象づけるために、アガメムノンとカッサンドラを運ぶ凱旋車

を奴隷にではなく、二頭の白馬に引かせようとした。考えは見事だったが、実行にはいくつかの予期せぬ不愉快な状況が現出した。というのは、合図と同時に車が舞台に入ると、馬は気遅れして上がってしまったのか、その場で前の方からも後ろからも自然の欲求を放出してしまったのである。高名な文学者パヴロス・ニルヴァナスは国立劇場運営評議会メンバーであったが、予期せぬこの状況を説明しようと32年3月12日付「ネア・エスティア」紙に「知られている通り、音楽は繊細な馬に対しては奇妙にも便通剤として、また同時に利尿薬としても作用する。アガ멤ノンは宮殿の門に到着する前に凱旋車から下りねばならず、こうすることによって他の予見し得ぬ不愉快な事態を避け、上演に対して現実的奉仕をしたのだ」。次の上演でのアガ멤ノンの入場に、ポリティスは全く新しい方法を考えた。大きな盾の上に「王の中の王」を乗せ、それを体の大きな四人の奴隷が運ぶという方法だった。その頃の演劇では上演に際し、俳優たちは短い衣装をつけているので、脚の毛は剃っていることが絶対に必要だった。日光療法など全く知られていなかった時代であり、乳白色の脚線が前に出るからであった。こうしてヴェアキス扮するアガ멤ノンは、大きな盾の上に腰掛けて、脱毛した白くなまっしろい脚で現れた。小太りでもあったため、辛辣なユーモアを持った俳優のG・グリノスの烈しい批判を引き起こした。「アガ멤ノンは、まるで焼き上げるためにかまどへ運ばれる大皿の上の雌の七面鳥みたいじゃなかったか、え!？」

F・ポリティスによる国立劇場の時代は不幸にも二年半しか続かなかった。かれの突然の死が国立劇場の最も輝かしい時代の一つに終止符を置いた。この短期間における上演作品の目録の数と質は驚きに値する。その数三十、演出はすべてかれ自身によるものである。こうしてポリティスは、ギリシャの大衆に世界の演劇の最も著名かつ代表的作品を知らせたのである。「アガ멤ノン」とその後の「オイディプス王」および「ペルシャ人」の上演によって同時代人の身近に古代悲劇詩人をもたらし、「ジュリアス・シーザー」「ヴェニス商人」「オセロ」によってシェークスピアを現実的寸法に復元した。また「幽霊」と「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」の上演によってイブセンを知らせた。特にバクスマヌーとミノティスが主演した「幽霊」は国立劇場の歴史の中で古典となり、1950年にも同じ演出と舞台装置でこれを上演、それ以来70年までこの演出が繰り返され、ここで批評を一つだけ挙げておこう。33年2月9日付「エリニキ」紙上である批評家はイブセン劇の上演をめぐり、「どうしてポリティスはイブセンなど上演しようという気になったのか?最早事態は変わっていること

を認識していないのか？イプセンは古いし、どんな力もこれを生き返らせることはできないのだ」と異論を唱えた。（しかし、六十年以上経った現在でもイプセンが絶えず上演され続けていることは周知の通りである。）ポリティスはその他の劇作家たちの作品も上演している。シラー、ピフナー、メリメ、オストロフスキー、ゴールドーニ、モリエール、ショー、オニール並びに著名なギリシャ人劇作家劇作家たちの作品であった。

不幸にしてポリティスの超人的努力は期待されるべき理解を文化人たちから得られなかった。かれの周りには僅かしか味方がいなかった。大部分はむしろ熱狂的に彼を攻撃する側に立ち、演出者、組織者としてのかれの能力に疑問を示すまでに至っていた。T・アサナシアディスによれば「ポリティスの劇上演はわれわれに感動を与えない。息吹きが欠けている。何故なら演出家が演劇人ではなくて文学者だからだ。かれの演出の才気は文学であり、知ったかぶり以外のものではない」（34年12月6日付「ネオス・コズモス」紙）。これらすべてがかれの健康を害し、1934年12月3日心臓発作により僅か四十四歳で死んだ。アレクシス・ソロモスはその著『国立劇場の半世紀』で「国立劇場がかれの任命を得て幸福だったとすれば、かれの突然死で同じくらい不幸になった。バイロンはキーツの墓碑に、かれを殺したものは、かれを非難したこれこれの雑誌である、と述べている。だから低俗なそれやこれやの攻撃が二年半の創造的活動の後ポリティスを墓場へ送ったのだ。かれが愛した国立劇場の傍らの聖コンスタンティノス教会で大盛会となったかれの葬儀の席には本当の友人の他に、非常な対抗者や批評家たちも泣き女らを伴って参列した。」と書いている。

葬儀の日である34年12月5日付「カシメリニ」紙のG・ヴラホスの記事によれば「心不全のため死して横たわってもなお、自分の後ろを歩いてくる人々を支配しているかのようで、屍となったポリティスは敢えて自分の後ろの葬列に従う連中を非難して立ち上がるのではと思っていた。」

更に辛辣なのは34年12月6日付「パトリス」紙上の短詩で、これは最も烈しい対立者であったスピロス・メラスの心臓を直接打つものであった。

「スピロス・メラスは汝の死を嘆く  
仮令汝に対し悪しき妨げとなったにせよ ...  
おお！ 死せる人よ！  
されど、よき友人らは  
ユダの口づけ持て、  
汝、フォトス・ポリティスを弔いぬ。」

このようにして国立劇場の長い歩みの最初であるフォトス・ポリティスの時代は終わった。結びとしてA・ソロモスの言葉を挙げておく。

「極めて短い期間に、活動的なこの演出家は驚くべき均質性を持つ専属劇団を創り上げ、完全な作業体制を組織して、われわれに豊かなギリシャと外国の上演目録を教えてくれたのである。」

## (2) D. ロンディリスの時代

ポリティスの死は国立劇場の再生と活性化にとって損失だったが、かれの傍らにはディミトリス・ロンディリスが存在した。ロンディリスはマリカ・コトプーリ劇団で才能ある俳優として出発し、その後ドイツに渡ってラインハルト学校でかなりの期間修行し、演出家への道を歩んでいたが、ギリシャ国立劇場での上演が始まってから一年後の33年ギリシャに戻ると、ポリティスの演出助手となった。劇場の正式プログラムにも「演出F・ポリティス—D・ロンディリス」と書かれるようになっていた。運営評議会での満場一致でポリティスの後継者として承認されると、国立劇場の権威を更に高める新たな創造的活動のロンディリス時代が始まった。当時は一部の俳優、特にミノティス、パクシヌーに対する配役上の優遇等が話題になった。1937年には支配人としてコスティス・バステアスが任命された。初代のグリパリスは35年3月辞任し、その後は運営評議会のメンバーで、「カシメリニ」紙の社主G・ウラホスが就任していた。ウラホスは運営評議会の議長I・ダンヴェルギスが死去した時、その後任となった。更にその後は詩人のK・カルセオスが襲った。こうした中で1937年9月8日、「八月四日体制」の独裁的首班I・メタクサスが国立劇場支配人に新聞記者で文学者のバステアスを任命したのである。

## (3) バステアス支配人の功績

新支配人バステアスの指導はエネルギーで直接的だった。ロンディリスの単独指導を廃するため、二人の演出家タキス・ムゼニディスとD・マツーキスを国立劇場に入れた。競争が生まれ、正しい方向に向かう第一歩になった。マツーキスは間もなく劇場を去ったが、ドイツで学び二十七歳で国立劇場に入ったムゼニディスは、市中劇場でも演出家としての才能を示した。国立劇場の演出家はポリティスも、ロンディリスも、ムゼニディスも、二年後に入ってきたカツェリスも、あるいはミノティスもドイツで学んだ人たちであった。ムゼニディスはロンディリス専用のミノティスとパクシヌー以外の国立劇場の全俳

優を使つての演出をしたが、1943年の独軍占領下に強制されて去ることになる。

バスティアス支配人体制の功績の一つは、国立劇場を国内のみならず国境を越えてフランクフルトやロンドンへの海外公演をさせたことで、ソフォクレスの「エレクトラ」からシェークスピアの「ハムレット」まで上演し、演劇のヨーロッパに真っ向から相対してコンプレックスを克服させたことであった。第二は、ロンディリスのヴィジョンであった古代劇を自然の空間で上演することで、1938年9月7日エピダヴロス古代劇場で二十五世紀を隔ててソフォクレスの「エレクトラ」が上演され、グリパリス訳の「おお、トロイアへ遠征せし、かのアガメムノンの息子よ...」という主演俳優ニコス・ロザンの朗々たる言葉が響いたのである。かくして、エピダヴロスの古代劇場は復活し現実となった。第三の手柄は、国立劇場の存在をアテネ以外に、ギリシャ国内の市町村にも知らしめるべく、「古代悲劇創造者の車」という移動演劇班を創って、外国から購入したトラックやプルマンで国内巡業を行ったことである。この移動演劇班の運営には若い演出家ペトロス・カツェリスが任命された。これは職探しの俳優たちを救うことにもなった。

#### (4) 独軍占領—解放時代

1940年10月28日、悪夢のサイレンの響きが順調だった演劇活動の夢を砕いた。ギリシャ・イタリア戦争の勃発であった。国立劇場は「ヴェニス商人」を上演することになった。33年のポリティスによる初演から二度目の上演で、シャイロック役はヴェアキスではなくミノティスであった。

しかし爆撃の恐怖から国立劇場はブカレスト通りの映画館パラスで上演を行うことになった。アギオス・コンスタンティノス通りの建物は観客の安全を保障し難く、他方パラスには大きな地下室があり、防空壕として使えるからであった。劇団は徴兵のため若干の若手俳優がいなくなり、上演は徴兵を免れた俳優たちによって辛うじて行われていた。41年4月27日、アテネは独軍に占領され、国立劇場の長い悪夢の夜が始まった。日常生活が平常に戻ると、アギオス・コンスタンティノス通りの建物に帰って、旧来通り作品を上演した。正統政府はエジプトに亡命し、占領下の首相はツォラコグルー将軍だった。文相はドイツで学んだ婦人科医ロゴセトプロスで、国立劇場にも若干の関心を示し、一時的に運営評議会の議長となった。かれはバスティアスを支配人の地位から追放し、イタリア人に受けのよかった新聞記者でレビュー作家のN・イカリオニスを就任させた。国家は既に経済的に破産しており、国立劇場も恐ろしい打撃を

受けた。収入は枯れ始めた。無論、占領下の「政府」も占領軍側も文化活動に無条件で補助金を付けようなどとは全く思わなかった。占領期間、特に1941年から42年の相次ぐ飢餓と死の時期を国立劇場はどのようにして生き延びたのか。それはそこで働いた人々の精神力だったという以外説明がつかない。こうした悲劇的状况の中で、かなりの価値ある出し物も上演された。国立劇場の目録は占領当局の厳しい管理下に置かれ、主としてドイツ古典（ゲーテ、シラー、レッシング等）や危険性のないモリエールやポーマルシェ等の仏作品が認められた。

43年に入るとイタリア人から任命された支配人の下で、目録の検閲を受けながらの仕事はできないとしてロンディリスとムゼニディアスが離れ、さらに多くの幹部が辞めていった。給与は低く、生存するにも足りなかった。他の市中劇団に移る者も出て、劇場の芸術的活力は落ちた。初めにヴェマキスが辞め、コツオプロス、マノリドゥー、デンドラミス、カトラキス、パラスケヴァス、ヴォコヴィッチ、ホルン、ハジスコス等が「市中に活を」求めるためこれに続いた。パクシヌーとミノティスは国外に去っていた。しかし落葉の季節の国立劇場にもカツェリスとカランディノスという二人の演出家の下で若干の優れたチーム、例えばパバダーキ、ロザン、グリノス、カルーソス、アルケーウ母娘、ムスターカ等が残っていて、劇場の品格ある水準を維持していた。ファシスト・イタリアの失墜と同時に傀儡的イカリオニスは総支配人の地位を失った。この地位は臨時にアンゲロス・テルザキスが勤めたが、かれは間もなく劇作家の仕事に戻り、結局老作家のニコス・ラスカリスが就任した。しかしわがまま俳優たちにこづき回されて苦勞し、びくびくしていた。占領が終わるとインフレが激化し、給与は五日毎に支払われた。五日ごとに給与も物価も上昇した。

1944年11月12日ドイツ軍占領からアテネが解放されると、国立劇場内のレジスタンス派は互いに猜疑心をもって対立する二派に分かれてしまった。10月26日、国立劇場は解放を祝う上演を行なった。アイスキュロスの「ペルシャ人」の朗読、M・ローダの一幕物「自由」、A・シケリアノスの講話等で、演出はS・カランディノス。パバンドレウ首相と英国のイーデン外相も列席した。しかしこれは全くの混乱の中に終わった。44年11月24日付文書による命令で俳優たちの入場が禁止された。文相として十二年前国立劇場を開設して生命を与えた同じ人物が、今度は首相としてこれに新たな生命を与えるために閉鎖に踏み切ったのである。しかし事態の展開の方が早く、44年12月の悲惨な「十二月事件」でかれは首相を辞任した。アテネを混乱、飢え、破壊と死の淵に沈めたこの血塗られた時期は、国立劇場の場での厭わしい行為によっても烙印を押された。



優れた主演女優エレニ・パバダキの忌まわしい殺害であった。

### (5) 1945年冬と夏－ヨルゴス・セオトカス登場

「十二月事件」の蜂起による市街戦で国立劇場の建物は相当の被害を受けた。ギリシャの内線であった。火災を浴びずに済んだものの、内部は略奪を免れず、裸同然の姿だった。パバンドレウ首相の辞任後はプラスチラス将軍が就任、閣内の文相に対し建物を修復し速やかに国立劇場が機能するよう命じた。直ちに45年2月12日、支配人には三十年代世代のヨルゴス・セオトカスを任命した。セオトカスは45年中は劇場を閉鎖し、充分用意をして戦後の国立劇場の活動をイロドス・オ・アッティコス古代劇場における古代悲劇か古代喜劇によって開幕すること望んでいたが、実際的なプラスチラスは早速に劇場を開くように命じた。セオトカスはあるがままの材料で開幕せざるを得なかった。グリノスやカルーソス等かなりの俳優は政争や戦闘に巻き込まれ、密告を恐れて姿を消していた。しかし演出家としてはカツェリスがおり、カランディノスも復帰していた。そうして仕事始めを急ぐ政府の圧力の下に、余り知られていないモリエールの二幕喜劇「ムッシュー・ドゥ・プールソニャック」がカランディノス演出で、オスカー・ワイルドの一幕物の「フィレンツェの悲劇」がカツェリス演出で3月に上演された。批評は散々で、45年3月25日付「アクロポリス」紙は「ワイルドの悲劇で爆笑し、モリエールの喜劇では涙を流すまで悲しんだ」と極評した。わが友ギリシャ人たちの批評は時になかなか「ごつい」。しかし国立劇場は兎に角にも仕事を開始した。夏にこそイロドス劇場で古代悲劇ないし喜劇上演を、とセオトカスは話していたのだが、実現はしなかった。ヴァルキザ合意の後でデンドラミス、ネーゼル、パラスケヴァス、コツオプロス、カルーソス等の旧世代の名優たちが国立劇場に復帰した。これらの俳優陣の他にセオトカスは市中の劇場からハルクーシ、ツァガネア、アーリス、ヴラホプロス等の円熟派と、若手としてサリア・カリガ、ルイーザ・ポディマタ、アレカ・マザラーキス、カツェーリ等を加えた。こうして国立劇場は活気のある劇団を持つことになった。まずはシェークスピア。夏のシーズンの初めの野外劇はクラフスモノス広場でカツェリス演出の「ヴェニス商人」だった。その後はカランディノス演出のゴーゴリ「検察官」。カランディノスは俳優のレパートリーの交換を行わせることで知られ、1960年新設の北部ギリシャ国立劇場の初代支配人となった時もこの方法を行った。舞台装飾についてはアンドニス・フォカスの専属制が十三年間続いたが、セオトカスの支配人時代に、最良の効果が挙げ

られるよう演出家の望み通りの専門家に発注できるように改めている。セオトカスの時代は短く、45年2月から46年3月まで約十五ヶ月弱。この間十一の作品が上演され、劇団の人員不足にも拘わらずかなりの成功を博した。

#### (6) D. ロンディリスによる建て直し (1946年～50年)

1946年3月に総選挙が行なわれ、大衆党のツァルダリスが多数を獲得し、右派政権が誕生。国立劇場支配人にも同系統の者を置くことになって、ロンディリスが今回は支配人として復帰した。かれ自身、演出家であったので、カツェリスとカランディノスは遠ざけられた。舞台装飾と衣装の仕事は再び独占的にクローニスとフォカスに委嘱された。それから劇団の再編に取りかかり、協力関係がスムーズにゆかぬ幹部俳優十三人を辞めさせ、劇団を新しくしようとしたが、期待の俳優たちは四散して空席は埋まらなかった。パクシヌーもミノティスもマノリドゥーも米国にあり、パパダーキは殺害され、デンドラミスは演劇を離れ、著名な喜劇俳優レベニオーティスとマミーアスは既に天国にあり、ロザンとアルケーウは高齢であった。ヴェアキスとグリノスは「芸術家連合」の名でアテネや郊外で公演していたが、政治的情念は未だ鎮まっておらず、復帰には右派政府と折り合いがつかなかった。ロンディリスは新たな若手のメンバーによって劇団を作るほかなかったが、それに成功したといえるであろう。その中には、ディミトリス・ホルン、ディミトリス・ミラット、リタ・ミラット、メーリ・アローニ、マノス・カトラキス、パンデルリス・ゼルヴォス、エリサ・ヴェルギ、ヤニス・アポストリディス、タキス・ガラノス、フリストフォロス・ネーゼル等の懐かしい名が見える。それから国立劇場の演劇学校を卒業したばかりの若い俳優たちがいた。抜き出していたのはステリオス・ヴォコヴィッチ、ニコス・ハジスコス、ディオニシオス・パバヤノプロス、アンドレアス・フィリッピディス、エレニ・ザフィリウ、ルイーザ・ポディマタ、デスポ・ディアマンディードゥーらでメリナ・メルクーリも加えられる。約四十人の専属劇団であった。戦前と異なり、今は支配人として国立劇場全体を管理する仕事があり、作品の演出と俳優の教育には十分な時間がかけられなくなっていた。

「ペルシャ人」に続いてシェイクスピアの「空騒ぎ」、次にはV・ユゴーの「ルイ・プラス」、ポーマルシェの「セヴィリヤの理髪師」等が上演された。「理髪師」を演出したコスティス・ミハイリディスは後に北部ギリシャ国立劇場の専属演出家となった。

### (7) 再びセオトカス (1950年～52年) - 国立劇場の変容

ロンディリスはアイスキュロス「オレステス三部作」の成功の後、シェイクスピアの「嵐」を上演、これが彼の白鳥の歌となった。というのは、1950年3月の総選挙で中央派のプラスチラス・ヴェニゼロス派の勝利となったからである。四年前に国立劇場を去ったセオトカスが無名戦士の墓の前の衛兵のごとく交替した。演出家として英米で学んだアレクシス・ソロモスや苦いパンを四年間食べたソクラティス・カランディノスも迎えられた。

新体制はカルロス・クーンセプトロ・テグニクスの「芸術座」から多くの顔ぶれの集団移籍を行ない、国立劇場陣容の強化を図った。また既に引退していた大女優キヴェリの国立劇場入りも歓迎された。米国で大して芽が出なかったパクシヌーとミノティスが帰国する。50年～51年冬のシーズンにミノティスはイプセンの「幽霊」を演出して成功。51年夏にはデルフィの古代劇場跡で「オイディプス王」を演出、自らオイディプスを演じた。かれは演出家の道を進むことになる。イロディオンではエウリピデスの「ヒッポリトス」を上演する。

### (8) 三たびロンディリス (1953年～55年)

1952年12月の選挙で右派のパパゴス元帥が勝利。その右腕マルケジニス調整相の選任により、ロンディリスが国立劇場の支配人に任命された。セオトカスはギリシャを去り、自作のキャンペーンのため米国へ向かった。53年3月の官報は国立劇場の新支配人と運営評議会メンバーの任命を発表。旧運営評議会の全員は既に辞任していた。ロンディリスには冬のシーズンが未だ二ヶ月あり、この期間に米国公演で成功したパクシヌーによるソフォクレスの「エレクトラ」を上演した。しかしセオトカスに続き、芸術座のクーンや他の幹部俳優たちや演出家カランディノスも国立劇場を去った。残った俳優たちは少なくなっていたが、ロンディリスは夏のシーズンにイロディオンでエウリピデスの「ヒッポリトス」を上演した。53年～54年の冬期にスピロス・メラスの風刺作品「王と犬」を上演。これはディオゲネスとアレクサンドロス大王との関係を風刺したもので、ディオゲネス役はヴォコヴィッチであった。国立劇場が上演するメラスの作品としては34年の「ユダ」、40年と47年の「パパフレッサ」に続く三番目のものであり、全てロンディリスが演出した。それからシェリダンの「ライバルたち」、次いでバーナード・ショーの「悪魔の人間」を上演。

ロンディリスは長年の夢であるエピダヴロスでの古代劇上演を1954年の夏、「ヒッポリトス」をもって行ない、これが翌年から正式にフルムジオス支配人の

下でエピダヴロス演劇祭として上演される準備となった。この年パヴロス国王夫妻が欧州の国王や王族を招いて行なったエーゲ海周遊の途次、エピダヴロスの古代劇場を訪ねて観劇する段取りとなり、翌年からの新しい演劇祭の広報に役立った。エピダヴロス近くのリグリオ村には当時電気もなく、出演者たちの宿泊はナフプリオンとされた。当時の道はでこぼこの悪路で砂埃を浴びつつ俳優たちは毎朝六時にバスで劇場に着き、八時まで稽古、夜ナフプリオンに戻って食事をして寝るのは午前二時、そうして起床は朝四時というハードスケジュールで、睡眠不足に苦しみながら、一週間の稽古で古代劇上演を成功させたのである。ロンディノスはアイスキュロスの「オレスティア」をイロディオで上演し、翌5年にエピダヴロスで上演することを目指していた。10月3日に初めて上演したが、雨のためこの計画は潰えた。

### (9) エミリオス・フルムジオス支配人 (1955年～64年)

1955年フルムジオスが国立劇場の支配人となった。西独のヴィスバーデン国際演劇祭に「オイディプス王」「ヒッポリトス」をもって参加、帰国すると、6月からのエピダヴロス演劇祭には「オレスティア」が間に合わず、「ヘカベー」「オイディプス王」「ヒッポリトス」を上演した。続いてヴェネチアのピエンナーレ演劇祭、パリの世界演劇祭、10月にはユーゴスラビアのベオグラードとザグレブで「ヘカベー」と「オイディプス王」を上演した。

フルムジオス支配人の体制は一年毎の契約更新制を廃止し、俳優の待遇を改善、市中劇場の待遇に劣らぬようにし、週九回の上演回数を十回とした。

53年～56年の冬のセゾンはアレクシス・ソロモスの演出でシラーの「マリー・スチュアート」を上演。続いてミノティス、パクシヌーによる「ハムレット」。初日は国王夫妻、カラマンリス首相他閣僚たちが観劇した。平行して現代ギリシャの劇作家ヤコヴォス・カンパネッリの「天地創造の第七日目」を上演、国立劇場の第三監督コストス・ミハイリディスの演出で好評だった。次にはやはり現代ギリシャ作家サマラスの「お大尽」。演出家は同じくミハイリディス。こちらは不評、がら空き。

56年、第二年目のエピダヴロス演劇祭ではミノティス、パクシヌー主演による「メディア」とシノディヌー、コツォプロス主演による「アンティゴネ」を上演。「メディア」は上演された6月23日が土曜日だったため、観客数は三千のみ。当時土曜は休日でなかったため、以降しばらく土曜のエピダヴロス公演は行われなかった。その後週休二日制が定着し、コリントス・エピダヴロス間

の道路が完成して、アテネからの時間が一時間短縮されるようになると、土曜日は演劇祭期間中最も賑やかな日になった。「メディア」はアテネ演劇祭の枠内でもイロディオにて上演。折からギリシャで撮影中の米映画「島の女」に出演中のソフィア・ローレンも観劇し、楽屋を訪問している。

56年～57年冬期。ゲーテの「ファウスト」、チェーホフの「かもめ」、ミノティス演出でシェークスピア「リア王」等。またイヨルゴス・セオトカスの「ペンデリ山での出会い」。

57年のエピダヴロス演劇祭（第三年目）。「アウリスのイフィゲニア」（シノディヌー、コツォプロス主演、ミハイリディス演出）。「リュシストラテ」ソロモス演出。

57年～58年冬期。3月パリの世界演劇祭に再び参加。一行八十名は三台のバスで出発、ユーゴ内の積雪に難渋。出し物は「メディア」（パクシヌー主演）、「オイディプス王」（ミノティス主演）、「アウリスのイフィゲニア」（シノディヌー主演）、「リュシストラテ」（アローニ主演、ミノティス演出）。

58年エピダヴロス演劇祭（第四年目）。「タウリスのイフィゲニア」（ミハイリディス演出、シノディヌー、コツォプロス主演）、「コロノスのオイディプス王」（ミノティス主演）。

58年～59年冬期。シェークスピア「オセロ」（D・ミラット主演。スピロス・メラス演出）、N・カザンザキス「背教者ユリアノス」。国立劇場によるカザンザキスの作品上演は二回目で、最初は46年のカランディノス演出「カポディストリアス」。1932年から59年までの二十七年間に、カザンザキスの作品はこれのみであった。詩的作品は技術的に上演困難というのがその理由だった。59年以降は現在までに「ユリアノス」「カポディストリアス」「蜜蜂」「仏陀」が上演されているが、最初のもの以外はソロモスの演出で、まずまずの成功を収めたが、偉大な文学者の「作品はそのまま読むべし、劇化は控えるべし」という批評は避けがたい。

59年エピダヴロス演劇祭（第五年目）。アリストファネス「蛙」（ソロモス演出）、アイスキュロス「オレスティア」（ロンディリス演出、好評）。

59年～60年冬期。シェークスピア「じゃじゃ馬馴らし」「リア王」「リチャード三世」（ミノティス主演）、「ヴェニス商人」（ソロモス演出）。

60年エピダヴロス演劇祭（第六年目）。この頃俳優たちは演出家別に三グループに分かれるようになった。ミノティス・グループにはミノティス、パクシヌー他。ソロモス・グループの俳優たちはシノディヌー、コツォプロス他。ミ

ハイリディス・グループにはマノリードゥー他。この年の主要上演作品、エウリピデス「フェニキアの女たち」（ミノティス演出、コロスの音楽はミクス・セオゾラキス）、「狂えるヘラクレス」（タキス・ムゼニディス演出）。また、アリストファネスの「アカルナイ人」を上演する予定であったが、主演予定者の病気のため、メナンドロスの「気むずかしい男」に変わった。少し前にアレクサンドリア期のパピルスの中からスイスの高名なギリシャ語学者ヴィクトル・マルティンによって発見され復元されたテキストによる上演であった。演出はソロモス。拍手のうちに迎えられたマルティン教授の姿が印象的であった。

60年～61年冬期。「ヴェニスの商人」（ミノティス演出）、「リチャード三世」。他にミノティス演出でディレンマツ「老婦人の訪れ」、オニール「マルコポーロ」等。

61年エピダヴロス演劇祭（第七年目）。ソフォクレス「エレクトラ」（シノディヌー主演、ムゼニディス演出）「アイアス」等。折からエーゲ海を船旅中の当時のケネディ米大統領夫人がパレア・エピダヴロスに上陸。「エレクトラ」の総稽古を熱心にフォローした。カラマンリス首相は特に米国ファーストレディのためにイロディオで「アウリスのイフィゲニア」を上演させ招待した。

この当時の主演クラスの俳優たちの給与は一ヶ月約一万ドラクマ。（因みにその頃私の俸給は約五千七百ドラクマ—中位以下の俳優クラスといったところ。）成績のよい者は一ヶ月に千～二千五百ドラクマの範囲内で昇級を受け取った。この頃、映画監督として有名なカコヤニスがいリーニ・パパスを主演にエレクトラの映画を撮るため国立劇場の専属俳優にも声をかけたが、劇場は出演を許可しなかった。

61年夏からは古代の神託で有名なドドーニの古代劇場が復旧され、演劇祭がイピロス研究協会の手で発足、国立劇場もこれに全面協力することになった。国立劇場は八月、エウリピデスの二つの「イフィゲニア」で古代劇上演を始めた。63年にはエウリピデスの「アンドロマケ」を上演、これは初演であった。古代劇の俳優たちやコロスの衣装は薄いので、夕方のイピロス山地での二時間近くの上演で体はすっかり冷えきってしまうと聞いたことがある。ドドーニ演劇祭の後、キプロス大統領マカリオス大主教の招待によるキプロスでの古代劇上演が行われた。カラマンリス政府も民族的目的と見なして援助した。キプロス独立後初めての訪問であった。野外劇場があるキレニアやリマルソルでソフォクレスの「エレクトラ」と「アウリスのイフィゲニア」を上演した。

61年～62年冬期。キプロスから戻り、1月、国内の地方都市パトラ、ヴォロ

ス、ヨアニナ、ロドスへの巡業を行った。作品はクセノプロスの「ヴァレレーナ伯爵夫人の秘密」。主演は1952年以來の当たり役となっているキヴェリ夫人で、八十歳近くだった。他に、M・シエラの「ゆりかごの子守歌」とクールトリンの「警察署長はいい男」。国立劇場では悲劇や古代悲劇に比して喜劇が少なく、全体の十五パーセント位といわれる。アリストファネスの喜劇上演にも市民劇場からの協力に待つほかはなかった。

パリの世界演劇祭にはまた三台のプルマンで七十人が出発した。上演作品は「フェニキアの女たち」「コロノスのオイディプス王」「アンチゴネ」で、いずれもミノティスの演出。

62年エピダヴロス演劇祭(第八年目)。ミノティス演出でエウリピデスの「パッコスの信女」(音楽マノス・ハジダキス)等。

62年～63年冬期。スピロス・メラスの「リガス・ヴェレスティンリス」(ミノティス主演)。初日には国王も観劇。

63年エピダヴロス演劇祭(第九年目)。ミノティス演出でアイスキュロス「縛られたプロメテウス」、エウリピデス「アルケスティス」(ムゼニディス演出、シノディヌー、コツォプロス主演)、アリストファネス「蜂」(ソロモス演出、ネーゼル主演)等。八月のドドーニ演劇祭にはムゼニディス演出でエウリピデスの「アンドロマケ」を上演。この頃カラマンリス首相は辞任。フルムジオス支配人体制も残りの日々が数えられるようになってきた。

63年～64年冬期。アイスキュロス「縛られたプロメテウス」、オニール「夜の中への一日の長い旅」、ディーレンマツト「老婦人」と「幽霊と自然界」、シェークスピアの「ヴェニスの商人」「アントニーとクレオパトラ」(シノディヌー、コツォプロス主演)。

11月3日の総選挙でG・パバンドレウの政党が多数を占め、政府が任命されたが、三ヶ月後の64年2月16日に改めて総選挙となり、パバンドレウの中央連合が大勝利を得、かれは首相となった。この選挙運動中にミノティスを支援していたソフォクリス・ヴェニゼロスは死去。ミノティスは国立劇場との契約破棄を申し出る。64年4月13日付「エトノス」紙は、パバンドレウ首相が国立劇場支配人の職務をマリオス・プロリティスに委ねることを決定したと発表した。最終的には国立劇場は芸術部門と管理部門に分離、前者はミノティスに、後者はイリアス・ヴェネジスに委嘱された。

64年エピダヴロス演劇祭(第十年目)。フルムジオス体制の末期、当初予定の「アガメムノン」に代わって、ソロモス演出によるアイスキュロス「嘆願す

る女たち」を当てた。第二の悲劇はエウリピデスの「イオン」をムゼニディス演出で上演。アリストファネス「平和」。「アンドロマケ」と「アルケステイス」は再演。6月30日に支配人交代が行われた。

#### (10) ミノティス—ヴェネジス体制（1964年～67年）

この時期の主演俳優の一人、アンナ・シノディヌーが退団を発表。理由はミノティスの演技指導に対する長年の不満。ミノティスは彼女を歌劇団のメンバーに過ぎぬと低い評価をしてきた。「嘆願する女たち」の演出家ソロモスも主演女優不在で辞意表明。シノディヌーはパパンドレウ首相自身による説得で辞意を当面撤回、ソロモスもムゼニディスの「イオン」と順序入れ替えて凌ぐ策で一応平静化。しかし結局シノディヌーとソロモスは退団した。国立劇場では演劇のラジオ放送も始まり、量よりも質の水準向上が取り上げられた。冬のシーズンには計七作品（新作五、再演二）。夏期シーズンでは悲劇の新上演二（「アガメムノン」「トロイアの女たち」）と喜劇一、悲劇の再演七。

64年～65年冬期。マテシ「ヴァシリコス」（ミノティス演出、初演は1933年、F・ポリティスによる）、イプセン「ノラ」（ムゼニディス演出）、ミュッセ「ロレンザッチョ」、ジロドゥー「シャイヨーの狂女」（ミノティス演出）。

65年エピダヴロス演劇祭（第十一年目）。アイスキュロス「アガメムノン」。アテネでは俳優たちの月曜休日が56年から定着しつつあったが、エピダヴロスでは未だ実施されていなかった。法的には人口五千以上の町では月曜休日が規定されていたが、リグリオ村の人口は二千五百だった。「アガメムノン」は大成功、特にコロスは大好評だった。エピダヴロスの後はイロディオ、ドドーニで、また9月にはブルガリア、ルーマニアで公演を行った。

65年～66年冬期。ジロドゥー「シャイヨーの狂女」、パンデルリス・プレヴェラキス「聖なる殺戮」。1月からはロンドン公演でミノティス演出の「オイディプス王」と「コロノスのオイディプス」を上演し、成功だった。

66年エピダヴロス演劇祭（第十二年目）。ムゼニディス演出「嘆願する女たち」、「コロノスのオイディプス王」。

悲劇俳優として広く名を知られるようになっていたコツォプロスは国立劇場を退団してアンナ・シノディヌーと合流し、前年に出来たりカヴィトス野外劇場へ去った。エピダヴロスでの「嘆願する女たち」の後、クレータ島の蜂起百周年記念行事として8月末レシムノンで、ミノティス演出のプレヴェラキス「ヘファイストス神殿」を上演。



## (11) 軍事政権時代 (1967年～74年)

国立劇場で「マクベス」上演が続いていた67年4月21日、軍事政権が発足。しかし国立劇場の管理面の状況に差し当たって変化はなく、従来の体制が続いた。ただ、ヴェネジスは辞意を表明、後任はタソス・アサナシアディス。エピダヴロスでは「フィロクティティス」の後、「イオン」が上演され、軍事政権のコリアス首相が観劇したほか、最終日にはパタコス副首相も来訪した。カナダ政府から9月末に古代悲劇の上演招待が届き、67年万博の枠内の企画としてモントリオールへ出発。作品は「コロノスのオイディプス王」「アガメムノン」、アリストファネス「プルーツス」(トリヴィザス演出)。

67年～68年冬期。カナダ公演後、国立劇場の二人管理体制は廃止され、ミノティスはアメリカから、自分とパクシヌーの辞表を送付した。ピランデッロ「アンリ四世」(トリヴィザス演出)、バーナード・ショー「君には絶対に分かるまい」(ムゼニディス演出)、オスカー・ワイルド「理想の夫」(復帰したソロモスの演出)。同じく復帰したカランディノスはモリエール「タルチュフ」とクセノープロス「死者の日」を演出。(カランディノスは十五年間国立劇場から離れていたが、その間1960年にカラマンリス首相に説いて北部ギリシャ国立劇場を創設させた。)

68年エピダヴロス演劇祭(第十四年目)。ソロモス演出によるアイスキュロスの「テーバイに向かう七人」、ムゼニディス演出によるエウリピデス「レーソス」、ソロモス演出のアリストファネス「騎士」。「フィロクティティス」の上演にはアメリカにいるミノティスが反対を唱え、代わりに「メディア」に決まる。エピダヴロスの後は、イロディオオン、ドドーニで「メディア」「レーソス」「アルケステリス」を上演。

68年～69年冬期。9月末にムゼニディス演出でチューホフの「桜の園」上演。

69年エピダヴロス演劇祭(第十五年目)。「バックスの信女」(ソロモス演出)、エウリピデス「エレクトラ」(ムゼニディス演出)、「アンチゴネ」「女の平和」。

69年～70年冬期。シェークスピア「嵐」(ソロモス演出)、ワイルド「ウィングミア夫人の扇」(カランディノス演出)、モライティーニスの喜劇「永遠の生命」(コストプロス演出)、モリエール「気で病む男」。

70年エピダヴロス演劇祭(第十六年目)。ムゼニディスは以前の管理部門を追い出そうと図った後、国立劇場での演出部門に限って仕事を続けた。エピダヴロスでの出し物については、ムゼニディス、ソロモス、コストプロスの三人

で分け合うことになり、ムゼニディスは「アウリスのイフィゲニア」、ソロモスはソフォクレス「トラキスの女」、コストプロスはエウリピデス「ヘラクレスの後裔」を演出した。喜劇ではアリストファネスの「雲」（ソロモス演出）。

70年～71年冬期。ムゼニディスはシラーの「マリー・スチュアート」上演を決める。エピダウロスで一連の上演が終わるとテッサロニキを訪れ、その後はキプロスへ。ニコシアに新しく出来た市立劇場でのこけら落としの公演でマカリオス大統領の歓迎を受けた。キプロスから戻ると、このセゾン二番目の出し物のテネシー・ウィリアムズ「胸に薔薇を」を上演。このセゾン中、演劇会場として全ての機能を備えたモダンな演劇空間「<sup>ネア・スキニ</sup>新舞台」が入場券売場の上に設けられた。新旧内外の劇の実験、稽古、舞台装置、衣装等の多面的検討を行える場であり、劇作家が来て見ることも出来た。軍事政権は地方都市との協力で十箇所演劇拠点を作るべしとの要望から五千万ドラクマの補助金の支援を行なった。が、結果的には資金は風に舞い散り、地方劇場は出来なかった。（軍事政権は自由を奪ったとして非難が絶えないが、演劇に関してはそれほど酷い扱いはしていない。現にギリシャ側が大成功だったと記した第一回の本邦公演は軍事政権下で実現している。）

71年エピダヴロス演劇祭（第十七年目）。上演数では最大の九回、作品数では七（悲劇が再演を含めて六、喜劇が一）。アイスキュロス「ペルシャ人」（ムゼニディス演出）、エウリピデス「オレステス」（ソロモス演出）、「パッコスの信女」、「トラキスの女たち」、「ヘラクレスの後裔」等。

71年～72年冬期。ピランデッロ「山の巨人たち」（エヴァンゲラトス演出）。「ネア・スキニ」での最初の仕事は、マリア・ラムパダリードゥーによる「エレクトラ」のコロスだった。ソロモスの手から「オレスティア」を奪い取ったムゼニディスは4月初めにロンドンでのワールド・シーズン・シアターで上演するために仕事に没入した。（これは66年にミノティス演出で上演している。）

72年エピダヴロス演劇祭（第十八年目）。エヴァンゲラトス演出によるソフォクレス「エレクトラ」。

72年～73年冬期。ヴェテラン俳優マノス・カトラキスが二十五年振りに国立劇場に復帰。

73年エピダヴロス演劇祭（第十九年目）。合計十作品、悲劇八、喜劇二。カトラキスの「オイディプス王」をもって6月30日から8月18日まで八回、土・日に上演。

73年～74年冬期。ムゼニディス演出で「オセロ」を12月半ばに上演。初の

日本公演のため、74年2月24日、一行七十五名（俳優は六十人）が日本へ出発。アメリカ往訪時よりも大きな規模であった。日本文化財団の招待によるもので、公演地は東京、大阪、京都、札幌。出し物は「アガメムノン」「オイディプス王」（いずれもムゼニディス演出）、「オレステス」（ソロモス演出）の三つ。この時点までに国立劇場は二十回の海外公演を行ない、二十六の首都を訪問しているが、日本における歓迎は群を抜いていた。日本公演から戻ると、4月には「オイディプス王」をもってトルコを訪問、イスタンブールとアンカラで公演。

74年エピダヴロス演劇祭（第二十年目）。「縛られたプロメテウス」、「アルケステス」、「アンティゴネ」、「オイディプス王」、「女の平和」等。プロメテウス役には抵抗力と力強い発声が必要であるが、主演の俳優たちは高齢となっていた。「プロメテウス」が終わると、トルコ軍のキプロス侵入により動員令が下り、以降の上演はなくなった。その後の政治展開は早かった。軍事政権は崩壊、カラマンリスが帰国する。国民統一政府の文化大臣ツァツォス（後の大統領）はエピダヴロスでの上演を続けるよう命じた。事態は平常であると見せるためであった。「オイディプス王」を上演することになった。政治状況の変化は必然的に国立劇場支配人の更迭を意味する。

## (12) 再びミノティス浮上（1974年～81年）

文化大臣は国立劇場の組織の更迭を行ない、今までの支配人は引退させ、後任にミノティスを据えた。64年にイリアス・ヴェネジスと分け合った席に今回は唯一の支配人となった。最初の仕事は軍事政権が遠ざけていた人材を劇団に戻して活力を回復することであったが、ミノティスもこのイニシアチブを余り歓迎してはいなかった。多くの俳優たちと余りいい関係になかったからである。個人的理由からムゼニディスとコストプロスの二人の演出家の常勤体制を廃止し、さらに「ネア・スキニ」は新しい俳優の育成場にすると言明した。しかし、初めこそ若いギリシャ人作家の作品を上演した（マリオス・ボンディーカス「トロンボーン」、モナ・ミトロプルー「軽業師」等）が、翌年から声価の定まった作品を古参の俳優が演じるという風に変質していき、「ネア・スキニ」は「中央舞台の延長に過ぎない」とされた。ミノティスは74年～75年の冬のシーズンを古典、即ちピフナーの「ダントンの死」で始めた。この時期俳優たちは十年來の願望であった国立劇場芸術家協会を設立したが、その目的は俳優たちの権利を守ることであった。従来、管理体制側からは顧みられることもなく、政治環境もこうした組合の自由には好意的ではなかったため、軍事政権が失墜し

た今が、現実化の好機であった。会長と評議会メンバーが選出された。ミノティスも見守らざるを得なかった。

75年～76年冬期。シラーの「ドン・カルロス」。ミノティスは76年に九十歳、流石に健康のため煙草をやめたが、77年にはソフォクレスの「フィロクティティス」を演じ、78年にはドドーニでの上演も行なった。エピダヴロス演劇祭では「コロノスのオイディプス王」。78年には北部ギリシャとの交流で、テッサロニキで「リア王」を上演した。その間運営評議会はミノティスの健康を考慮し、独断でD・ロンディリス演出による「エレクトラ」を決定した。ロンディリスも八十歳近かった。ミノティスは既に上演している「フィロクティティス」と「コロノスのオイディプス」で対抗した。が、ロンディリスも過去の名声を再び蘇らせることは出来なかった。今や演出家と俳優とは共同の目的のために協力し合うという関係になっているのに、ロンディリスは演出家が責任を負い、俳優は意志を持たずに実行する機関だという昔の考えから抜け出せないでいた。78年のエピダヴロス演劇祭はロンディリス演出の「エレクトラ」で始まったが、結果は最低だった。二週間後はソロモス演出の「メディア」、それからアリストファネス「騎士」と「女だけの祭り」。喜劇の上演は悲劇ばかりのサハラ砂漠の中の花一輪の印象だった。

76年10月国立劇場はモスクワとレニングラードを訪問、「コロノスのオイディプス」と「騎士」を上演（前者はミノティス、後者はソロモス演出）。その後ニューヨークとボストンでの公演、さらに三年後には日本と中国での公演があった。出し物は「縛られたプロメテウス」と「フェニキアの女たち」だった。

民政復帰後、ツァツォス文化相は運営評議会にクーン、エリティス、モラリス、テルザキス、ハジキリアコス・ギカス、I・M・パナヨトプロス等文芸界の重鎮を配した。支配人には本人の強い希望と投票によってミノティスが選出された。選挙が容易に行われるように文化相は年齢制限規定を撤廃したが、この選出に反発したのはカルロス・クーンである。クーンは裁決する人と裁決される人としての役割には相容れぬものがあるとして、直ちに辞任した。残りのメンバーも個人的希望を強く打ち出すミノティスの熱望には初めから否定的だった。コスタス・ニツォスは月刊誌「テアトロ」で「ミノティスは支配人の地位を自分の個人的野心を実現するために求めているのであって、管理を委された国立劇場のためにではない」と痛烈に批判している。ある朝、主管省の制令はかれを支配人の地位から引退させ、アレクシス・ソロモスを就任させることを告げた。

### (13) 国立劇場刷新の動き

国立劇場の改革実現を期待していたソロモスの時代は短すぎた。僅か数カ月後には政権の交代により、かれもこの地位を去らねばならなかった。国立劇場の俳優の数は百五十前後で推移したと思われるが、この時期は凡そ百十、刷新計画では一年に三十三人ずつ交替して三年で終了と踏んだようである。が、問題は どうして三十三人を追い出すかではなく、後を埋める俳優をどこで見つけるかということにあった。市中の劇場で質のいい俳優を見つけることは難しかったし、求めていたのは古典劇や古代悲劇を演じられる俳優であった。にも拘わらず、管理当局は主管省の後押しで刷新計画実行に即時踏み出した。第一回分として三十三人の首を切ったが、この中には大きな成功歴もある幹部やエピソード演劇祭で不可欠のコロスの構成員も入っていた。劇団が活性化するためには体質一新が必要であることに異議を唱える者はいなかったが、しかし徐々に時間をかけ、レパートリーの必要に応じて行うべきであった。

### (14) その後の国立劇場

92年から94年までの支配人は以下の通り。92年12月から93年12月、ドーラ・ツァツィ、94年3月から同7月までコスタス・ポリトプロス、94年7月から同12月までラルーラ・フリシコプルー代行。

95年1月10日、ニコス・クールクロスが支配人に就任。国立劇場は法的ステータスを変更、私法上の法人格となった。95年以降四十以上の作品を四つの舞台（中央劇場、新劇場、実験劇場、コトプーリ・レックス劇場）と「子供の広場」（パクシヌー・シネアック会場）で上演した。平行して、88年から実験劇場に「自由空間」を置き、若い演劇集団の自由な作品上演を歓迎している。この時期に、国立劇場は国境を越えて「ギリシャ文明」の紹介にあたり、97年からニューヨーク、ボストン、テル・アビブ、ストラスブルグ等十四の都市でエウリピデスの「メディア」とソフォクレスの「エレクトラ」を芸術的にも商業的にも成功させている。最近の二年間には俳優の「実験工房」とギリシャの技術教育強化を目指した「文化教育セミナー」が催されている。脱皮した国立劇場は健在である。